



## 幼児の宗教性をさぐる

上 沢 謙 二

### ◇ABCのお祈り

道ばたの草の中に、ひとりの小さな子供がひざまずいて頭をさげていた。

通りかかったおじさんが何をしているのかと思つて、そつとそばへ寄つてみた。子供は気がつかない、気がつかない筈だ——目をつぶっているのだから。

おじさんはへんに思つて、ここんで額を近づけると、小さな声で子供の口から出てきた。

「ABCDEFGHIJ……ABCDEFGHIJ……」

子供は同じ言葉をくりかえしているのである。

いよいよへんに思つたおじさんは、とうとう口を開いて聞いた。

「ちよつと——坊や、何しているの？」

目をあいた子供はびつくりしたようにおじさんを見上げたが、しずかにいつた。

「僕、お祈りしているんです」

こんどはおじさんがびつくりした。

「お祈り？ 今、坊やがいつていたのはお祈りじゃない、ABCDEFGHIJじゃないの」

子供はまじめな顔をして答えた。

「ええ、だつて、僕、何ていつてお祈りしていいかわからななんだもの」

これはアメリカの物の本に書いてあつたお話である。

### ◇幼児に宗教があるか

児童の殊に幼児の宗教々育が問題になる時、或る人はいう。

「宗教は見えざるものに対する関係であるから、尠くとも形

而上の觀念又は概念的思考が尙かない間は起らない。それは亦自我意識に根ざすものであるから、渺くとも自分という觀念がはつきりしないうちは始まらない。ところで、幼児期はその二つとも極めて漠然としているか朦朧としている。だから、宗教を教えることはできない。」

そういう人は、この「ABCのお祈り」の話を聞くと、こういうだろう。

「このお祈りには内容がない。ABCのくりかえしでは無意味だ。謂わば藻抜けの殻だ。これではお祈りにならない。なぜこういうお祈でないお祈が出てきたかといえ、そこには宗教的理解も宗教的自覚もないからだ。このお話は正に前説の裏づけとなるものだ。」

いかにも教育は「引出す」仕事である。まず引出されるものが相手になければならぬ。それが具わるのを待つて行われねばならぬ。今日の教育に於て「成熟」ということが重視されるのは、そのために外ならぬ。児童のうちに自覚の成熟、思考の成熟がない場合に、それを必要とする教育を課することは、徒らな重荷を負わせて、彼等を苦めるばかりでなく、成長の芽を抑圧してねじまげるようなことにもなる。単なる誤り以上に、烈しい言葉を使えば罪惡ともいわれるであらう。

そうとすれば、幼児期に於ける宗教教育もこの弄難を免れないことになるだろう。

### ◇宗教と宗教性

それならば、幼児と宗教は全く無関係なものであらうか。

成程、この子供のお祈の内容だけ観れば、そこにあるものはABCばかりで、宗教のガケラもないだろう。しかしお祈という行動に出たということはどうしてだろう。この行動は自分のすきな遊びではない。又は命令されてする勤めでもない。その動機は興味からでもないし、義務からでもない。謂わば対人関係とは別な、日常生活とは離れたことである。そこには「神」と呼ぶにふさわしい觀念又は対象はないが、渺くとも親や友だちや、目に見えるものに話しかけるのとはちがつた心持乃至態度があらわれている。これはどうしても普通とちがつたものといわねばならぬ。そのちがいはどういふ言葉でいいあらわされるべきかといえ、**「宗教的」**という外はないだろう。とすれば、この出来事は「内容又は觀念に於ては宗教的といえないが行動又は態度に於ては宗教的といわねばならない」ということになる。

ここに於てか、幼児と宗教は全く無関係なところが、大に關係があるということになる。しかし又それは充分なものではなく不完全なものだということになる。

人間の一生は成長の過程であり、発達史である。成長発達とは連続を意味し推移を意味する。小から大へ、単純から複雑へ、未分化から分化へが成長発達である。成長発達は無から有を生ずることではない。後に大きくなるもの、複雑になるもの分化するものが、初めの小さいもの、単純なもの、未分化なものの中に含まれているのである。しかし「含まれている」とい

つても、その中にそれが小さくなつて存在しているとか、見えないように隠されているとかいうのではない。後のものはまだ全然ないのである。あるのは将来さうなる傾向というか、勢能というか、可能性というか——さういふものなのである。

そこでこの場合、幼児が持つている宗教的なものは、宗教そのものと区別するため、しかし宗教と相曳くことを示すため「宗教性」と呼ばれるのである。

よく引かれる譬であるが、植物の種子や芽のどこにも花や実はない。それを真二つに割つても、寸々に切つても、見出だされない。しかしそれは将来たしかに花になり実になるのである。さうなる傾向をもち、勢能を有し、可能性を帯びているのである。

種子や芽の時代には花や実はないから、種子や芽に対する世話や手当をひたすらにするだけで、花や実に対するそれは一切やらない。けれどもそれは将来よき花を咲かせ、よき実を結ばせるのに、しなくてはならない欠くことのできないものである。もし種子や芽に対する世話や手当をしないでほうつておけば、けつしてよき花は咲かないし、よき実は結ばない。それどころか、一輪の花も、一穎の実もつけないでしまふかも知れない。

恰も宗教は花か実である。それは後の青少年期になつてあらわれるもので、幼児期には見られないが、しかし種子か芽に比すべき宗教性を、その時代に持つている。だから幼児期には宗教に対する世話や手当はしないが、宗教性に対するそれはひた

すらにやる。それは将来よき宗教の花を咲かせ実を結ばせるのに、しなくてはならない欠くことのできないものである。もし宗教性に対する世話や手当をほうつておけば、恐らく宗教は充分に開花しないし結果しない。それどころか、一輪の花も一穎の実もつせず、人生の最も深い尊とい根本の世界を知らないで、一生を終つてしまふかも知れない。

幼児期に於ける宗教性の涵養が必要であらう重要である所以はここににある。

### ◇愛に於ける宗教性

幼児の宗教性についてまず考えられるのは愛である。彼等は愛を要求する。愛は人間の本能であり本性であるが、殊に力の弱い幼児はこれなしには一日も生きていけないだろう。

幼児期に於ける愛は、まず見えるもの、親しいものに向かつて注ぐ。親、友だち、保姆などがその対象になる。彼は彼等によつて、愛というものを知るのである。知るといつても知識的にはない、概念として受入れるのではない。彼等との現実の愛の生活によつて、経験として学び取るのである。即ち言葉による伝達や、命題の授受でなく、実際に愛されること、愛することによつて、それをわがものにするのである。

子供はまず愛されねばならない。それによつて愛は心のうちに目ざめる。

母は子供が泣けば乳をふくませる。むずかれば抱きあげる。眠くなれば歌をうたう。かくて彼の欲求は満たされる。そうし

て満たしてくれたものへ心がひきつけられる。即ち愛が生まれるのである。

そのように愛には欲求が先行する。欲求を見て取つて、充分にそれを満たしてやるところに、愛はすくすくと成長するのである。「見て取る」ためには鋭い注意がいる。「充分に満たす」ためには、深い愛がいる。そうあるのには心から相手を受さねばならない。愛することがあらゆる教育の根本であることはいうまでもないが、殊に宗教性の涵養に於ては、愛はまことに純粹で深厚であらねばならない。というのは、愛によつて何かを与えるというのが普通の教育の場合で、例えば道徳を説くにせよ、国語を教えるにせよ、お話を聴かせるにせよ、子供に對する一片の愛がなくてなされれば、それは単なる形式、方法技術となつてしまふ。だから、愛が必要だとされるのである。即ち道徳、国語、お話を与えることが目的で、愛はそれをよりよく与えるための手段として裏づけとしては必要なのである。ところが、宗教性の涵養の場合は、愛そのものを与えることが目的で、手段でも裏づけでもない、絶対なのである。だからそれを受ける相手に対して、他の場合以上の愛が籠められ發揮されねばならないのである。

自分が愛されると、他を愛するようになるのは自然である。かくてその子供は愛されること又愛すことが、どんなによきもの、高きもの、深きものであるかを味得し會得する。そうしてやがて彼が自覚と理解を生じて、全精神が最高存在に向かう時その経験と印象が神の内容乃至屬性に当てはめられ結びつけら

れることは極めて自然であろう。かくて力と生命がある神觀念が成立するのである。

米国の宗教心理学者ジョーヂ・コーは、子供の「他を愛する」心の働きと宗教との關係を特に重視してこういつた。

「児童の基督教的経験は、彼が或るものに対して親らしく望む衝動から始まる。我等がまず神を愛し、そうして他人を愛し実際に神のような關心をあらわすところの自身の経験を通してのみ、我等は神の見地に立つことができる」

### ◇信頼に於ける宗教性

幼児の宗教性として次に考えられるのは信頼である。

信頼は幼児の特徴といつてよい。それは一つには経験が狭く知慧が浅く、広い立場から觀察し、高い観点から判断することが困難だからである。つまり批判力が具わらないからである。だから、いわれるままを受入れ、示されるままに従うのである。二つには幼児に取つては、この世は未知未見の事物に満たされているので、見るもの聞くもの不安の種となり、恐れの際となることが多く、それに堪えられないからである。だから彼等は「信頼する」というより「信頼しないではいられない」のである。

それはまず始終接觸する親や、保姆や、長上に向かつてさざげられる。

まわりに異常な声や音が起つて幼児が不安に響かれると、母はその前に立ちただかつてしつかりとかばう。目の前に見知ら

ぬものがあらわれて幼児が恐れにふるえると、保姆の手は烈しくふられてそれを追い払う。それで不安は去り恐れは消えて安定感に包まれる。かくて安全にしてくれたものに対して信頼が生れるのである。

そのように信頼には不安や恐れが先行する。しかもそれは或はごく隠微なものであり、或は甚だしく激烈なものであるから親切な行届いた心ずかいがなされねばならぬ。ふと「お母さん」と「先生」と呼びかけてきた幼児の声の中に、深い期待と信頼が籠められていることを、感じ取らねばならぬ。それを迂闊に聞き流してはならない。聞き取つたにしてもいいかげんにあしらつてはならない。況んや面倒くさいなどとほうつてしまつてはならない。そうして期待に背き、信頼を裏ぎるようなことが度重なつたらどうだろう。その子供のうちに芽ぐんだ信頼性はむざむざと薙ぎ倒されてしまうような恐ろしい結果にならないと誰が保証できよう。

宗教性涵養の立場からいえば、子供の信頼性を認めて、その発現を誤りなく取扱うというのでは、実は充分とはいえない。逆にこちらから子供そのものを信頼せねばならぬ。時に彼等に間違いがあり、ばかばかしさがあり、いやらしさがあり、いけなさがあつても、ただそのことのために、不用意に譏つたり、笑つたり、徒らに疎んじたり、怒つたりしたのでは、未だ彼等を信頼しているとはいえない。否、そういうことがあればあるほど、相手の心に深く分け入つて、その本性を見出だし、その真髓を突きとめて、信頼を新たにするのでなければならぬ。そ

れで子供の信頼はいよいよ強められ深められて育つていくだろう。

かくて時来たつて、この宇宙人生に於て、信すべきものを信じなければならぬ場合におつかつた場合、正しく且つ確かに信頼をささげようになることは、必然といつてよいだろう。

### ◇感謝に於ける宗教性

幼児の宗教性として第三に考えられるのは感謝である。

愛が湧き、信頼が生ずると、子供は母を見るたびに笑う、近づけばその方へ手を伸ばす、顔を寄せれば歓声を挙げる。否、姿が見えないでも、声を聞いただけでも、足音がしただけでもその方へふりむいて、にこやかになる。それは欲求が満たされ不安が補われ、心が充足安定した結果、おのずから感謝の情が芽生えてきたのである。

感謝にはうれしい喜ばしい感情が含まれているが、それだけではない。それ以上である。謂わばうれしいとか喜ばしいとかは自己中心の感情である。相手がいつしよに喜べばうれしさは二倍になるが、必ずしも相手を要しない。相手は何も知らなくとも自分ひとりでも喜べる。しかし感謝は必ず相手によって要する。相手がなければ感謝は生じない。それは相手によつて触発され、相手に向かつて集中する感情である。純粹な美しい対他的感情である。或る学者は「感謝の情には相手が自分のためにどんな犠牲を払つたかを悟ることと、その犠牲に酬いようと望むことを含んでいる」といつたが、尠くとも報恩の心又

は行いの基礎又は前提になつてゐることは明かである。

時には感謝の念が極めて薄い人か、殆ど感謝することを知らない人がある。極端な利己か冷情の持主である。こういう人は「閉ざされた世界」に住んで、より広く、高く、深く生きることを肯んじない。それで宗教の世界など知らずに終るようなことになる。

宗教は感謝の世界である。まず自分の存在に対して感謝する。その感謝を高く見えざる神にまで拡充する。その感謝を汎く人生の奥にまで徹底する。その感謝を深く困難、悲哀、逆運の中にまで浸透する。しかもその感謝から、神に酬ゆるための奉仕の生活が生まれてくるのである。

そこまでに達する感謝が、既に幼児期に発現するので、この時から實際生活を通じて感謝の経験を与えねばならぬ。それには感謝が自然に自発的に起るような経験を彼等に提供せねばならぬ。

ウィリアム・フォーブツシュはその著「子供の家庭教育」の中に、美しい例を掲げている。

「うれしいピクニックをした日、寝る前に母と子とそのことについて話し合う。あたたかい日光、美しい花、清い流れ、かわいらしい小鳥、おいしいお弁当などが思いかえされる。子供の心はおちついた喜びに満たされる。そこで自然にこんな会話が導き出される『よかつたわね。誰が連れていつてくださったの』『お父さん』『お父さん、いい方ね』『そう』『じゃあ、お父さんにお礼をいいますか』『ええ』『何てお礼をいうの』

『お父さん、ありがとうございます』『そうね、じゃあ、お礼をいつていらつしやい』子供はよろこんで父のところへいく。更にもう一步進んでこういう問答も交わされるだろう。『誰がそんな花や、川や、鳥や、お日さまをつくつて、あなたをそんなに楽しくさせてくださったの』『神さま』『神さまつていいお方ね』『そう』『じゃあ、神さまにお礼をいいますか』『ええ』そこで子供の口からこういう言葉が出るだろう『神さま、ありがとうございます』と。

『そうしてフォーブツシュはつけ加えている。

『感謝が、幼児の初めての祈の中心であらねばならぬ』

### ◇敬虔に於ける宗教性

幼児の宗教性として第四に考えられるのは敬虔である。

敬虔は崇高偉大なものに対して発する心である。それはまず差別の觀念を含む。自分と対象との差別に気がつく。差別感が大きければ大きいほど、自分の弱小を感じて、崇高偉大の感が増す。更に驚歎の感が湧く、そんなに崇高偉大なものがあるのかとおどろくのである。しかしただ自分を卑下して驚くだけでは、恐怖は生ずるだろうが敬虔は起らない。それにつづいて讚美する念が生まれる。対象に対し何等かの価値を見出だしてそれをほめたたえるのである。なおそれにあこがれの心が加わる。その価値と自分が、何等かの意味に於て関わりを持ちたいと希うのである。そこで帰依の感念、服従の態度があらわれてくる。敬虔とは以上のような内容を持つてゐるものである。

宗教が敬虔の念に基礎することはいうまでもない。それは無限の至高者を対象とし、それに驚歎し、それを讃称し、それにあこがれ、それに絶対の帰依と服従とをささげるのである。

勿論幼児にそのような複雑な働きは見られないが、相通するものは、それと看取される。

彼等は常に周囲に差別を見出だして、自分の弱小を痛感しているのである。幼児はよく泣く。思うようにならない時、思うようにしたい時、相手にされない時、相手にされたい時——何でも力の及ばない時は泣く。それは無力の自覚の変形である。

また彼等はよくおどろく。大きなものを見るとおどろき、見知らぬものに遇うとおどろく。初めて海を見た幼児が「気絶するほどおどろいた」ことを、或る親は報告している。

また彼等はよく服従する。勿論屢々否定と反抗があらわれるが、これを児童期青年期にくらべればよく服従する。幼児は親や先生の世話にならなければまだ充分に自立し得ない。弱さから、また与えられたものは一応すべて真実とする信じ易い性質から、意識の無意識的にそうなるのである。

幼児の指導者はこれをそのままほうっておいたり、いいかげんに取扱つたりしてはならない。弱小感や劣等感にならないように、驚異は恐怖にならないように、服従は強制的抑圧にならないように注意すると同時に、それをより高い方面に結びつけて、おおらかに発展させることに心がけねばならぬ。

神の絶えざる保護とか、自然界の創造としての神とか、神の整齊不変の法則とかいうことを、卑近な事例に即して具体的に

説明することも必要であるが、事実幼児が弱小を感じた際、精神的或は肉体的に力を籍してやること、すばらしい自然又はすぐれた歌や音楽のような芸術に接させて、深い感銘を与えるようにすること、或る規則又は約束を守つて遂行実現した時に、その意味と愉快を認めて褒め、又はそれに背いて怠り破つた時に、その無意味と不愉快を示して教えることなどは、より賢い処置といえよう。つまりジエームス・ブラットがいつたように、子供が行動して「自ら驚き、考え、感ずるようになることの方が、たくさんなもつたない言葉を学ぶよりも大切」なのである。

#### ◇生活経験を通して

幼児期の宗教的指導は、屢々神聖な宗教的命題又は知識を、親切に根気よく教えこむことだと思ひ做される。

「神は愛なり」ということを「イエスは救主」だということをおぼえさせることが、或はまた聖句を暗誦させることが、主の祈を暗記させることが、第一要義のように取扱われる。そうしてから「今はよくわからなくても、おぼえておけばいつかは役に立つ。幼児期におぼえたものは深く心にはいつてゐる」と。

これは真実である。墮落した青年が、幼ない時聞いた讚美歌をふと耳にして、それが改悛の動機になつたというようなことを、屢々聞く。幼時の印象は深く心の奥にはいつてゐるもので、意識の無意識的に伝く。だからその人自身が思つてゐるよ

り以上の影響を与えているにちがいない。我等はそれを否定するものではない。況んやそれを無用とするものではない。しかし「口から耳へ」の印象よりは、生活経験による印象の方が、より強く深いものがある。前者は観念に加えるところがあり、記憶として残るが、後者は現実の力となり、性格形成の働きに参加するからである。

更に注意すべきことは、宗教的命題又は知識は一定の内容をもつているので、自然窮屈になり、形式的になり、延いては宗教そのものを窮屈なもの形式的なもの化する傾向があることである。比較、弁別、分析、綜合などの思考が発達した大人は、その成分と意味とを適当に解釈して、真髓を把握することができるが、示されたままを受入れる幼児はそうはいかない。

例えば「天国は高いところにある美しいところだ」と教られた子供は、天国を空に求める。即ち天国は天の一方に局限される窮屈な条件をつけられ、そこに存在するものという一定の形式を与えられる。そこで或る女の子は「いくら空を見よつてそんなものはない」と失望する。

猶進んでそれが課せられると、制限束縛となつて子供に陥むようになり、そのために反動的にさへなることもある。或る一人の幼時の記憶にこう書かれた。「クリスチャンは偶像を拜んではならない。そうすると神さまは非常に怒りになると、父からいわれた。自分にはそれが一つの束縛になつたが、かえつてその束縛に反動して、或る時機の上に椅子をあげて、その前に頭をさげて折つてみた。けれども何事もなかつた」。

だから、一個の命題又は一種の知識によつて幼児に宗教を与えようとする時は、出来るだけ教義的な神学的な要素や色彩を避けて、現実的な生活的な単純な事実で即するようにしたい。或る学者はいつた「子供自身の経験で速かに否定するような主張や、子供に芽生えた正義感からふしぎに思つたり首肯しなかつたりするような、神の特性をまじえずに教えることはできないだらうか」。

### ◇最も基本的なもの

ウイリヤム・ブラット博士がその著「宗教心理学」(竹園賢了氏の邦訳あり)に於て、宗教を「態度」と定義したことは、幼児期の宗教性を考える場合に、一つの有力な参考を提供するものと思う。

博士は宗教を論ずる際、その内容である神観・人間観・世界観などよりも、その形式ともいへべき個人の態度を重視した。大凡宗教と呼ばれる現象について、その内容を観れば、初期の仏教から一神教まで、さまざま相違があつて、殆どまとまりがつかない。然らばどこに共通点があるかといへば、その態度である。そこにあらゆる宗教に通ずるものが見出だされる。だから「態度」こそは、宗教の基本的なもので同時に普遍的なものといえよう。博士は「宗教とは個人及び社会が自分等の利害や運命の最後の支配権を持つていると思つ力及び諸々の力に対する真摯な社会的態度である」と定義し、その「態度」を「与えられたものに主観的に反応する能動的な意識状態である」と



解釈した。更に宗教の内容がちがうのは、それが教義的神学的要素から成立しているからだと断じ、進んで「子供が概念的にものを考える年頃になる以前に教義を教え込もうとするのは、非常に覺束ない方法である」と結論している。

これを本稿に於て述べたところに照合すれば、幼児期には出来るだけ事実に沿い生活に即して、經驗として宗教性を覺醒するように説いたことは、即ち宗教的態度を養うことに当たり、又成るべく教授や説示による宗教的知識乃至觀念を与えることを避けるように述べたことは、即ち教理的神学的内容の提示を斥けることに当たるのである。そうとすればその行き方は、取りも直さず宗教としての基本的な共通的なものを育てることになるであらう。

想うに宗教の内容は、その人の精神的內容の成熟に従つて、それぞれの性格と、環境と、遭遇によつて与えられるものである。しかしそれをいかに受入れるか、受入れていかに發展するか、發展していかに結実するかは、一にそれに先行する宗教的態度の如何にかかるといふであらう。幼児期に於ける宗教性の涵養はかかる意味と、役割と、使命を有するものといつてよからう。

(45頁から) 「ウソウソ、ウソおつしやい」という事になる。

こどものお話は大部分こつこつという混同を含んでいる。つまり純個人的立場だけをよりどころにして、全てが物語られるのである。子どもにもケンカが多いのもこの為である。ケンカでなくて、口論、又は討論になるためには、二人が各「客観的主義」を確立して、その共通の地盤に立たねばならない。幼児にはこれができないのである。

(51頁から) 蟻の分泌が旺盛な若蜂は巢の造業に専念するか、壮年の蜂は巢を遠く離れて蜜源を探訪するとか、夫々その生理的機能に依じて行動することはいうまでもない。

### おわりに

ほんの大きつばではあるが蟻や白蟻、果は蜜蜂の社会生活をかいま見た読者はきつと直に自分達人間の社会生活を考へて見るに相違ない。そして何か割り切れないものをお感じになるのではあるまいか。そうした後味の悪さを幾分でも補正する意味で一言付加えたい。

要するに昆虫の社会は、一種の家族社会なのであつて、コロニーのメンバーは血統關係にあるといつてよい。而もこのコロニーの主宰者は、たゞ偉大なる生殖能力があるということのために存在価値があるのである、又コロニーに於ける職能的分化は總て生理的、形態的な、それこそ極めて顕著な裏づけの下に始めて矛盾なく發展して来たのである。(農傳 農林技官)